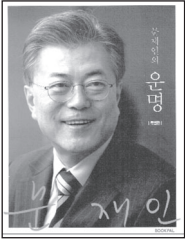


政治

文京洙（立命館大学国際関係学部特任教授）



文在寅 著

『運命 文在寅自伝』

(矢野百合子訳) (岩波書店 2019年)

문재인 『문재인의 운명 [특별판]』 BOOKPAL 2017

あまり悲しまないでほしい

生と死はみな自然の一かけらではないのか？

私に、すまない、とは思わないでほしい

誰も恨まないでほしい

運命だ

故盧武鉉大統領が釜山近郊烽下村(金海市)の自宅付近で自死に及んだ際に記した遺書の一節である(日本語訳は筆者)。「運命」とは、この遺書の言葉に由来し、本書はもともと盧の2周忌(2011年5月)に因んで書かれている。つまり本書は、文在寅自身の自伝であると同時に、ともに人権弁護士として活動した釜山での出会いから、参与政府(盧武鉉政権)時代(2013年3月～2018年2月)を経て、悲劇の最期に至るまでの二人の歩みの記録である。そこには、何かに導かれるようにして出会い、激動の時代を「サラム サヌン セサン(사람 사는 세상)」、つまり人が人らしく暮らせる世の中を夢見て苦闘した二人の男の成功と挫折が、飾り気のない、柔らかな筆致で綴られている。

「第Ⅰ章 出会い」は、盧が自死に及んだ「その日の朝」の悲痛な模様から書き起こされ、1982年に司法修習を終えた文が盧と合同事務所の相棒として出会い、2002年末の大統領選挙で勝利するまでを辿る。二人は当時の新軍部政権下で「労働・人権弁護士」として地域の民主化運動に身を投じ、労働争議や学生運動の「時局事件」の弁護に奔走した。とかくソウル中心に語られがちな韓国の民主化運動が釜山という視点から描かれて興味深い。

盧は1988年の国会議員選挙で初当選するが、その後は「大義を求めてひっきりなしに失敗と挫折を」繰り返すことになる。そういう盧の愚直さが「個人的な不利益にも躊躇しない〈原則の政治家〉」として国民の高い支持を得て、大統領選挙での逆転劇を生んだ。

「第Ⅱ章 人生」は、朝鮮戦争中、北朝鮮興南から南に逃れた避難民の子として1953年1月に生まれて弁護士となるまでの文の生い立ちを収めている。北朝鮮からの「避難は、米軍のLST(揚陸艦)でなされた」とされる。中国軍に追われて南下する米軍が避難民を助けたという美談が、「興南撤収作戦」として語られているが、文の両親もこの作戦で助けられた避難民であった。釜山に定着し、そこでの避難民の赤貧の暮らしぶり、一クラス80人以上でそのうち20人が授業料を払えず家に帰される小学校、高校時代の反政府デモなど、朝鮮戦争後の韓国社会にまつわる興味深いエピソードが綴られる。とりわけ、慶熙大学総学生会の中心メンバーとして臨んだ70年代の反維新闘争、さらに逮捕・除籍・復学を経て

光州事件が起こる1980年の挫折の体験などは、80年代に思想的に急進化したいいわゆる三八六世代（80年代に大学生となった世代）よりも1世代の上の民主化運動の経験が述べられている。1959年生まれの柳時敏の『ボクの韓国現代史 1959-2014』（三・一書房 2016）などと読み比べても面白いかもしれない。ちなみに柳時敏も盧武鉉時代に閣僚（保健福祉部長官）を経験し、本書のオリジナルともいえる『盧武鉉自叙伝 運命だ』（돌베개 2010年）の編集に加わっている。

興味深いのは、1980年5月の光州事件が起こる直前の、いわゆる「ソウル大回軍」の文在寅の評価である。5月15日ソウル駅前で20万人学生が結集し新軍部に反対する学生デモが最高潮に達したとき、学生運動の指導部（総学生会）は、軍の不穏な動きを察知して「全面退却」を決定した。この「ソウル大回軍」について「私はソウル地域の大学生たちの最後の瞬間の背信が5・18光州抗争で光州市民をしてあれだけ大きな犠牲をもたらしたと考える」と実に手厳しい。

「第三章 同行」には、参与政府5年の波乱に満ちた年月が収められている。文は、参与政府時のほとんどの時期を通じて大統領秘書室の高官として盧をサポートした。2004年に国会が盧の弾劾を可決し、その可否をめぐる憲法裁判では代理人団の幹事として実務を取り仕切った。その間、内政面では、弾劾騒動に加えて、司法を含む権力機関改革、権力による民間人虐殺や人権蹂躪を究明する過去事清算、国家保安法の廃止問題などの波乱があり、外交面では、イラク派兵、韓米FTA、南北首脳会談などで苦渋の決断を迫られた。イラク派兵やFTAは、政権の屋台骨となる「進歩陣営」の離反さえ招いた。イラク派兵について本書では「政府としては北朝鮮核危機の平和的・外交的解決のために最小限の形ででも派兵を受け入れる以外になかった」と述べられている。この点は「朝鮮半島平和プロセス」の立役者として米国との協調が不可欠でホルムズ海峡への派兵が米韓同盟の枠組みで要請されている現在の文在寅政権の状況とも重なる。

文は、青瓦台（大統領府）にあって人事や司法・権力機関改革に力を尽くした。なかでも、権威主義時代に「無所不爲」（出来ないことのない）の権力として肥大化した検察改革が至上命題とされた。だが、そのための「高位公職者不正捜査所」や「検察・警察間の捜査権調整」は実現できなかった。検察については「政治的中立性や独立性を最大限に保障」することに留まざるを得なかったが、李明博政権となるや政敵の内偵・査察や強引な取り調べ・逮捕など政治検察としての旧弊がぶり返す。そうした「政治報復」が任期を終えて烽下村に落ちついたはずの盧や周辺の人々を追い込むことになる。

文在寅政権下の2019年12月、野党との熾烈な攻防の末に盧武鉉時代には果たせなかった「高位公職者不正捜査所」法案が採択され、その翌月には「検察・警察間の捜査権調整」に関連する法案も採択されている。検察の捜査権の大幅な縮小という盧武鉉時代以来の悲願がようやく果たされている。

終章「第V章 運命」は、文を喪主として執り行われた告別式（国民葬）や50万人の市民が参加したソウル広場での路祭（ノジェ：街頭での追悼行事）の経緯と模様、そして参与政権の五年間が改めて検証される。

盧の死は、盧の生き様や精神を改めて韓国国民の胸深くに刻み、韓国政治の潮目を劇的に変えることになった。そこで蘇った変革への潮流が、幾多の曲折を経ながらも、ろうそく革命から文在寅政権の誕生というドラマを生んだ。その意味で本書は、いま文在寅政権とは何か、ひいては韓国の「進歩陣営」とは何かを知るうえで必読の書であるといえる。